隋都城の成立過程ー難波の都城化を考えるための覚書

村元健一

はじめに

難波地域の都市的景観の形成過程に関する研究は、近年の上町台地の地形復原、植生復原などの成果をうけ、大きく進展した。特に５世紀と考えられる難波津の成立と、それに密接に関わる法円坂倉庫群の建設については、近接地での同時代の遺構の発見や、遺物の検討の進捗により、孤立した開発ではなく、周辺に機能分化した遺構群の存在が想定されるようになった。また、いわゆる「難波宮下層遺跡」の研究も進み、王権に直結した屯倉との関係が具体的に議論されるようになった。このように、５～７世紀にかけての王権による開発が難波を大きく変貌させ、都市的景観を生み出し、それが難波遷都の前提となったことが明らかになりつつある。

古墳時代までに広域を支配し、また大規模な兵力や労働力を動員できる王権が誕生していたにもかかわらず、日本には都城と呼ぶべきものは誕生していない。都城どころか都市がないというのが飛鳥時代以前の日本社会の大きな特徴である。したがって、７世紀に始まる都城造営は、日本では都市建設の開始と同義ともいえる。難波が当初から都城としてつくり出された地域ではないことから、王宮を中核として都市もしくは都市的様相を呈するようになった飛鳥や藤原とは異なる展開をたどったと予想されるが、近年、その過程については、博多や葛城との比較の中で、南秀雄氏が詳細な検討を加えられている〔南 2013、2018、2019〕。

何もない土地に人口が集中する都市を築きあげるのは大事業である。そうした過程を明らかにするには日本の場合は史料が不足するが、中国ではほぼ同時代の隋代に大規模な都城を相次いで建設していることが参考になる。

本稿では、難波が都市化し都城が営まれる歴史的過程を明らかにする前段階として、史料的にある程度都市形成の状況を復原できる隋の様子を見ていくことにしたい。都城という政治的な都市を建設するにあたって、何が重視されたかを明らかにすることで、難波に都が置かれた前提を明確にすることにしたい。

第１節　隋文帝の都城政策

隋の文帝は大興城（後の唐の長安）を築く。隋の文帝が新たな都城を築いたのは、北周の都城長安のすぐ東南である。この文帝の選択について、以下の点を検討する必要がある。

①なぜ北周の長安を棄て、近接した場所に新たに都城を造る必要があったのか（図１）。

②即位前の文帝が外戚として実権を握った北周静帝期には、華北は統一されており、有力な都城候補地として、文化的に北周より優れていた北斉の都城の鄴、北斉の「別都」晋陽、さらに北周宣帝が復興に着手していた北魏の旧都洛陽があった。こうした有力都市を放棄し、新都市を築いた

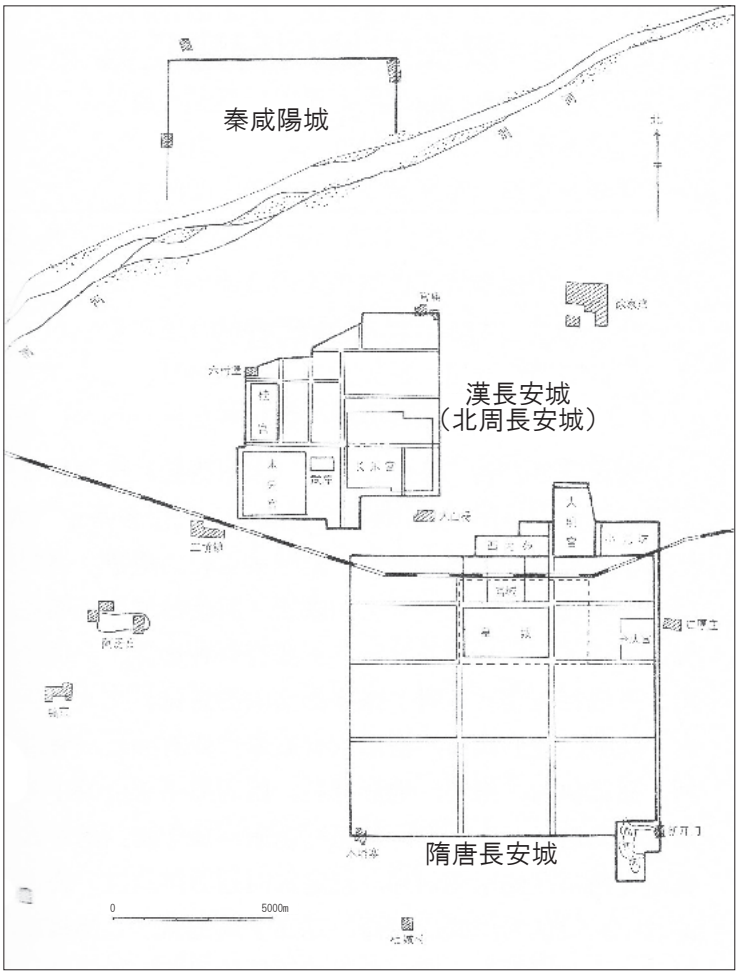

図１　長安歴代都城沿革図

のはなぜか。

③北魏が東西に分裂する以前において関中の衰退は明らかであった。不利な土地にあえて都城を営んだ理由は何か。

本節では以上の３点を検討したい。その前提として、文帝の遷都詔を検討する。『隋書』巻１・高祖紀の開皇２年６月条である。

丙申、詔して曰く「朕 上玄を祇奉し、萬國に君臨し、生を人の敝に屬し、前代の宮に處す。常に之を作る者の勞、之に居す者の逸を以為い、改創の事、心 未だ遑あらざるなり。而して王公大臣、陳謀獻策して、咸な云いへらく、羲・農以降、姬・劉に至るまで、代に當りて屢しば遷ること有るも、革命して徙らざるは無し。曹・馬の後、時に因循を見るは、乃ち末代の宴安にして、往聖の宏義に非ざるなり。此の城、漢從り、彫殘すること日び久しく、屢しば戰場と為り、舊と喪亂を經。今の宮室、事は權宜に近く、又た筮を謀り龜に從い、星を瞻 日を揆るに非ず、皇王の邑を建て、大衆の聚る所に合するに足らず、と。變通の數を論じ、幽顯の情を具にし、心を同じうして固く請うこと、詞情深切なり。然らば則ち京師は百官の府にして、四海 歸向し、朕一人の獨有する所に非ず。苟しくも物に利すれば、其れ違う可けんや。且つ殷の五遷は、人の盡く死するを恐る。是れ則ち吉凶の土を以て、長短の命を制するなり。新を

謀り故を去るは、農の秋を望むが如く、暫く劬勞すと雖も、其れ安宅を究めん。今 區宇 一に寧んじ、陰陽序に順い、安きに安んじて以て遷らん、胥怨を懐く勿れ。龍首山の川原は秀麗、卉物滋阜にして、卜食相土し、宜しく都邑を建つべし。定鼎の基 永固にして、無窮の業 斯に在り。公私の府宅、規模の遠近、營構の資費は、事に隨い條奏せよ」と。仍りて左僕射高熲、將作大匠劉龍、鉅鹿郡公賀婁子幹、太府少卿高龍叉等に詔して新都を創造せしむ。

この詔書の眼目は「革命して徙らざるは無し」という点にあろう。革命には遷都が伴うということを強調するため、文帝が即位した旧北周の長安のマイナス要素を挙げ、さらに新都候補地の優れた点を謳いあげる。この詔書により上記の問題のうち①の回答は得られる。まずは北周を超克するために遷都が必要とされたのである。だが、離れた都市に都を遷せば、旧都が持っていた交通網や為政者層の基盤などを作り直す必要がある。それを避けるため隣地に新都を造営したのである。なお、北周の長安は、都市機能を失い大興城の禁苑に取り込まれている。

②については、文帝が北周宣帝の崩じた後に連続して行った都市政策が影響している。すなわち、北周宣帝が復興事業を始めていた洛陽については、直ちに工事を中止した。また、北斉の旧都鄴については、そこに拠って楊堅に対し挙兵した尉遲迥を破った後、徹底的に破壊され、住民と都市機能は安陽に移された。北朝有数の大都市だった鄴は物理的に抹殺されていたのである。同じ施策は後に南朝の陳を滅ぼした後、建康に対しても行われる。このように文帝は他の大都市を徹底的に破壊する方策をとった。唯一残されたのは、北斉の別都とされた晋陽だけである。晋陽は大行山脈西側の拠点都市であり、かつモンゴル高原との通行にも適しており、軍事的要衝ではあるが、中華帝国の都城としては地理的に不利であり、地域的中核としては重視されても、統一帝国の都城とはなりえない。したがって、文帝の遷都先の候補としては鄴か洛陽があったが、文帝自身の手でその候補地は消されていたのである。

③に対する答えは②から必然的に導き出されるが、同時に②は③を前提として行われたともいえる。これについては文帝の権力基盤が問題となる。文帝の出自である楊氏は、漢族の名門である弘農楊氏を名乗るが、実態は鮮卑系で宇文氏に従った軍閥である。近年、見直しが進められているいるいわゆる「関隴集団」については[1]隋初の段階において、互いに姻戚関係を結び有効に機能していたことは認めてよいと考える。権力基盤として彼らの存在を重視し、また自らの権力基盤も考えた場合、関中を離れることは難しかったと考える。そのため、経済的、文化的に優れていた関東、江南を制圧後の対応としては、それらの拠点都市を壊滅させ潜在力を弱めると同時に、多量の人員を関中に徙すことで関中の優位性を高めるという手法を取ったのである。文帝の都城政策にはそのことが顕著に現れている。

以上のように文帝は関中至上主義ともいえる政策を実行した。都城は大興城だけの単都制であり、周囲に畿甸を設定し、府兵制の折衝府を多数配することで軍事的にも優位を保った。もともと関中に都城をおく場合の利点としては、周囲を山に囲まれた防御性の高さが挙げられるが、文帝の政策はその点も考慮したものだったのだろう。

関中に都を置くとして、従来の交通網などを継承するとすれば、旧都から離れないほうがよい。

さらに都城の住民は、関東・江南からの徙民、科挙制導入による新たな官僚層の創出などを考慮すると、大幅な増加は避けがたく、都城の大規模化は不可避だったとみるべきであろう。その結果として新都大興城は造営された。革命による新王朝の誕生を示すための遷都であり、新都の造営であった。至近の地での新都造営だが、旧来の都城を踏襲しないことで、新たな王朝の誕生を示したのである。また、都城規模は大幅に拡大された。上述の人口増加も都城の大型化の理由となるが、人口の集積が進んだ唐代でもこの都市内には空き地が多く、必要とさる以上の規模で造営されたのである。求められる人員への土地の分配ではなく、新王朝の威容を示すことに重点が置かれたのであろう。

第２節　煬帝の都城政策

隋の都城政策がユニークな点は、文帝、煬帝と２代続けて巨大な都城を築いたことにある。煬帝がなぜそうした政策をとったかは、煬帝の東京造営詔を見ても明らかではない。前節と同様に『隋書』巻三・煬帝紀・上の東京造営の詔から確認しておきたい。以下、行論の関係で番号を付して見ていくことにする。

（仁壽四年（604）十一月）癸丑、詔して曰く、

①乾道の變化するは、陰陽の消息する所以、沿創の同じからざるは、生靈の敍に順う所以なり。若し天意をして變わらざらしむれば、施化 何ぞ以て四時を成さん、人事 易わらざれば、政を爲すに何ぞ以て萬姓を釐めん。『易』に云わざるや「其の變に通ずれば、民をして倦ませず」「變なれば則ち通じ、通ずれば則ち久し」「德有らば則ち久なる可く、功有らば則ち大なる可し」と。朕又た之を聞く「安きに安んじて能く遷るは、民は用て丕變なり」と。是の故に姬の兩周に邑するは、武王の意の如くし、殷人の五たび徙るは、湯后の業を成すなり。若し人に因り天に順がわず、功業の變より見れば、人を愛し國を治む者は謂わざる可きや。

②然るに洛邑は古よりの都、王畿の內、天地の合する所、陰陽の和する所なり。控えるに三河を以てし、固むるに四塞を以てし、水陸通じ、貢賦等し。故に漢祖曰く「吾は天下を行くこと多きも、唯だ洛陽を見るのみ」と。古より皇王、何ぞ嘗て意に留めざるや。都せざる所は蓋し由有らん。或いは九州の未だ一ならざるを以て、或いは其の府庫の困を以て、作洛の制、未だ暇あらざる所以なり。我が有隋の始め、便ち茲の懷・洛に創らんと欲すも、日復た一日、越えて今に暨る。茲を念い茲に在るは、感哽を興言せん。朕 寶曆を肅膺し、纂いで萬邦に臨み、遵して失わず、心より先志を奉ず。

③今、漢王諒 悖逆し、毒は山東を被い、遂に州縣をして或いは非所に淪めしむ。此れ關河の懸遠に由り、兵の赴急せざるなり。加うるに并州の移戸を以て復た河南に在らしむ。周の殷人を遷すの意、此に在り。況んや復た南服は遐遠にして、東夏は殷大なり、機に因りて動きに順うは、今や其の時なり。群司百辟、僉な厥の議を諧えよ。但だ成周は墟堵にして、葺宇に堪えず。今、伊・洛に東京を營建すべし。便ち即ち官を設け職を分ち、以て民極と爲すなり。

④夫れ宮室の制、本と便を以て生る。上棟下宇、風露を避くるに足り、高臺廣廈、豈に形に適

うを曰んや。故に傳に云く「儉は德の共なり、侈は惡の大なるものなり」と。宣尼に云有り「其の不遜ならんよりは、寧ろ儉なれ」と。豈に瑤臺・瓊室を方に宮殿と爲し、土堦采椽にして帝王に非ずと謂うか。是れ、天下の以て一人に奉ずるに非ず、乃ち一人の以て天下に主たるを知るなり。民は惟れ國の本なり、本 固まり邦 寧く、百姓足る、孰與れぞ足ざらんや。今營構する所、務めて節儉に從い、雕牆峻宇をして復た當今に起こしむること無かれ、卑宮菲食をして將に後世に貽せしめんと欲す。有司 明らかに條格を爲し、朕が意に稱え、と。

この詔書では、②に「心より先志を奉ず」とあるように文帝の政策の継承という点が主張される。すなわち、洛陽は歴代王朝の都であり、地勢も優れ、文帝もこの地への奠都を望んでいたが果たせなかった。煬帝はこの文帝の遺志を継ぐものということになる。

だが、実態は文帝路線の継承とはおよそ言いがたい。煬帝期に行った諸政策は官僚機構の抜本的改訂など文帝路線と大きく異なる。洛陽造営は煬帝のそうした意思を最も強く反映している。

一方で煬帝は大興城の存在を否定していない。実質的に遷都でありながら、あくまでも都城造営のみをうたい、遷都とは述べない。煬帝の治世は圧倒的に洛陽滞在が多いが、大興城には宗廟、円丘などの礼制建築があり、皇帝の正統性を示す重要な都城であり続ける。洛陽は東京から東都とされて京師に準じる扱いを受けることで、大興城と共存することになった[2]。東都にも都畿も設定され、京師とおなじく王朝の拠点として機能している。次に東都成立の背景を見ておこう。

北朝期までの洛陽は、隋の東都が築かれた場所から東におよそ 15km はなれた場所である（図 2）。この地は西周以来、後漢、魏晋、北魏が歴代都を置き、さらに北周の宣帝が復興工事を始めていた

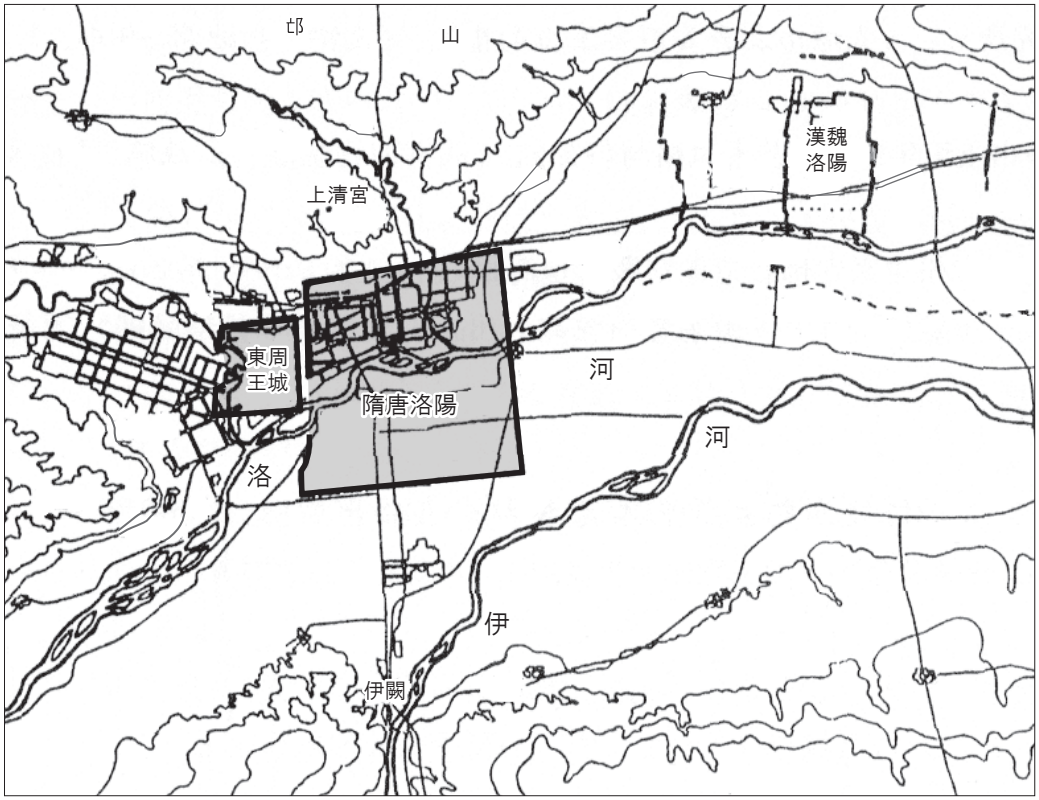

図 2　洛陽歴代都城沿革図

ことは前節で述べた。北周宣帝の構想では鄴にかわって関東支配の拠点と位置づけられていたようであり、石経の移設などが行われているが、施策が本格化する前に宣帝死去により中断している。しかし、支配拠点として機能し始めていたことは、文帝がこの地に東京小冢宰を置いていることから明らかであり、都市的景観を取り戻していた可能性がある。③にあるように煬帝即位時に晋陽に拠点をおく漢王涼が反乱を起こしたが、鎮圧後、晋陽の移民は河南に配された。河南県はまさに東都が築かれた場所に西接し、東都城造営後は西苑に取り込まれたため、県そのものは東都の郭城内に移ることになる。以上の状況を考えると、東都造営時に、漢王の遺民を徙すことで、洛陽・河南県はいずれも県としての規模がある程度回復し、一定の住民が存在したことが分かる。隋の東都は、まさにこれらの人々を都城の住民とすることで成立したのである。なお、煬帝が東都を築いた河南県城は周の王城内に位置する。王城も周の遺構であり、周辺では成周に次いで正統性を有する存在といえる。先に河南県城が西苑に取り込まれたと述べたが、煬帝の意図としては、周の王城を対象とするものだったと考えられる。

煬帝が敢えて東都を築いた理由はどこにあるのだろうか。煬帝即位時において旧北斉系の官僚は大幅に増加しており、これまでのように関中一辺倒の政策は出自の差による偏りが激しい。また南朝系官僚の活躍も見られる。こうした王朝の人的基盤の変化を見ると、洛陽遷都は十分にありうべき選択である。また、文帝期の関中本位政策は、関中での非食料生産人口を増加させ、食料不足を招いていた。経済的基盤の弱さを克服するためにも洛陽遷都は理にかなっている。

以上をまとめると、住民については、大興から徙民するのではなく、晋陽からの徙民で補い、これに大興から煬帝とともに移動してきた為政者層を合わせることで充実された。また、旧来の城郭を利用せずに苑地に取り込み、大興と基本設計を同じくする大型の都城を作り上げたことは、文帝の施策と共通する。煬帝の洛陽造営は文帝期で進んだ政治的、経済的変質に対応するための施策だったと評価できる。

第３節　隋の都城政策と正統性

以上、２節で見た隋の都城政策をまとめておきたい。

①新規都城の造営。従来の都城を超越した規模、プランを有することで、前王朝に対する優越性を示したと考えられる。

②旧都の利用。都市の機能を奪った上で、新都の苑囿の一部に取り込む。

③畿甸の設定。文帝は関中の防御性と北周以来の権力基盤を重視したが、煬帝は関東、江南を含めた版図全体の統合を進め、さらに都城の経済性を優先させ、洛陽に東都を築いた。これにより大興と東都を２つの中心として東西に長く、関中と関東にまたがる広大な畿甸が形成され、王権中枢を強化した

④徙民による都市民の充実。新規に築かれる都市の住民は旧来の都市の住民に加え、占領地もしくは反乱制圧地からの徙民により構成された。これに支配者層という非食料生産者層が加わることで、他都市との際立った差異となった。

これに加えて正統性の問題がある。特に大興が置かれた関中、東都の置かれた関東の洛陽の地は、前漢高祖の時からいずれが都城の地としてふさわしいか議論があった[3]。前漢では、交通の便に優れた洛陽を制し、防御に優れ、秦の拠点として豊かな穀倉地帯であった関中が選ばれた。しかし、前漢以降、儒家官僚の進出が始まると様相は変わる。彼らは周公旦を理想とするため、周公が築いた都・成周を重視する。洛陽は成周の故地とされたため、他都市にくらべ儒教的には圧倒的な正統性を有していた。その議論は前漢元帝期の翼奉により述べられ[4]、王莽により実際に着手されるようになる。王莽は洛陽遷都を果たすことなく滅びるが、この動きは後漢が洛陽に都を置いたことで結着し、以後、曹魏、西晋と都が置かれる。北魏の洛陽遷都、北周宣帝による洛陽復興も同じ発想に基づくとみてよい。

このような状況を見れば隋の文帝の大興造営は、王莽から北朝期までの洛陽重視の姿勢に反するものである。関中奠都は北周の権力基盤の継承を重視したといえるが、さらにいえば、北朝後半期に洛陽が戦場となり荒廃した歴史を踏まえ、防御性に優れた関中を選んだ可能性もある。そうした点では、儒教的な正統性とは別に、政権基盤の実利を重視してこの地に新都を築いたと評することができる。別言すれば、西魏・北周・隋と続く実際の王朝の連続性を重んじたといえる[5]。

これに対し煬帝は洛陽に都を置く。理由の一つには、即位時の問題もあり文帝路線から一定の距離を置くということがある。また、煬帝自身の江南嗜好が東都造営の要因の一つとも言われる〔妹尾達彦 2013・2014〕。こうした状況に加え、先述した洛陽固有の儒教的正統性も挙げることができるだろう。この考えに基づけば、煬帝の東都造営は、王莽から北朝まで連綿と受け継がれてきた洛陽重視政策への回帰といえる。

第 4 節　難波との比較

前節での検討結果を踏まえ、難波との比較を進めていきたい。まずは難波の持つ特徴を押さえておきたい。

難波が飛鳥と比較した際の最大の特徴は難波津に代表される港の存在である。また、遷都直前までの段階で、屯倉、難波小郡、大郡、館などの王権に直属する機関の存在も注目される。また宗教施設では、やや離れているが四天王寺が存在している。このように、難波、特に上町台地北端部は経済的な港、外交、内政にかかわる重要施設が置かれていたことが他地域にない特徴である。だがこれは博多地域にも該当する特徴であろう。難波と博多との違いは、飛鳥との距離である。孝徳の難波遷都後も、飛鳥やその周辺には板蓋宮や百済大寺など大王家にかかわる施設が残されており、難波遷都といっても飛鳥を完全に放棄したわけではない。大王にしろ阿倍や蘇我といった豪族にしろ、飛鳥およびその周辺を旧来からの拠点として重視しており[6]、奈良盆地南部との密な連絡も新都に求められた要素だったと考えられる。そうした点で、長年、飛鳥の外港として位置づけられていた難波は、水陸の幹線で飛鳥と密接に繋がっており、距離も近いことから、新たな宮を設ける条件が整っていた（図 3）。

さらに難波固有の問題として『日本書紀』に仁徳が都を置いた場所という伝承があることは重要

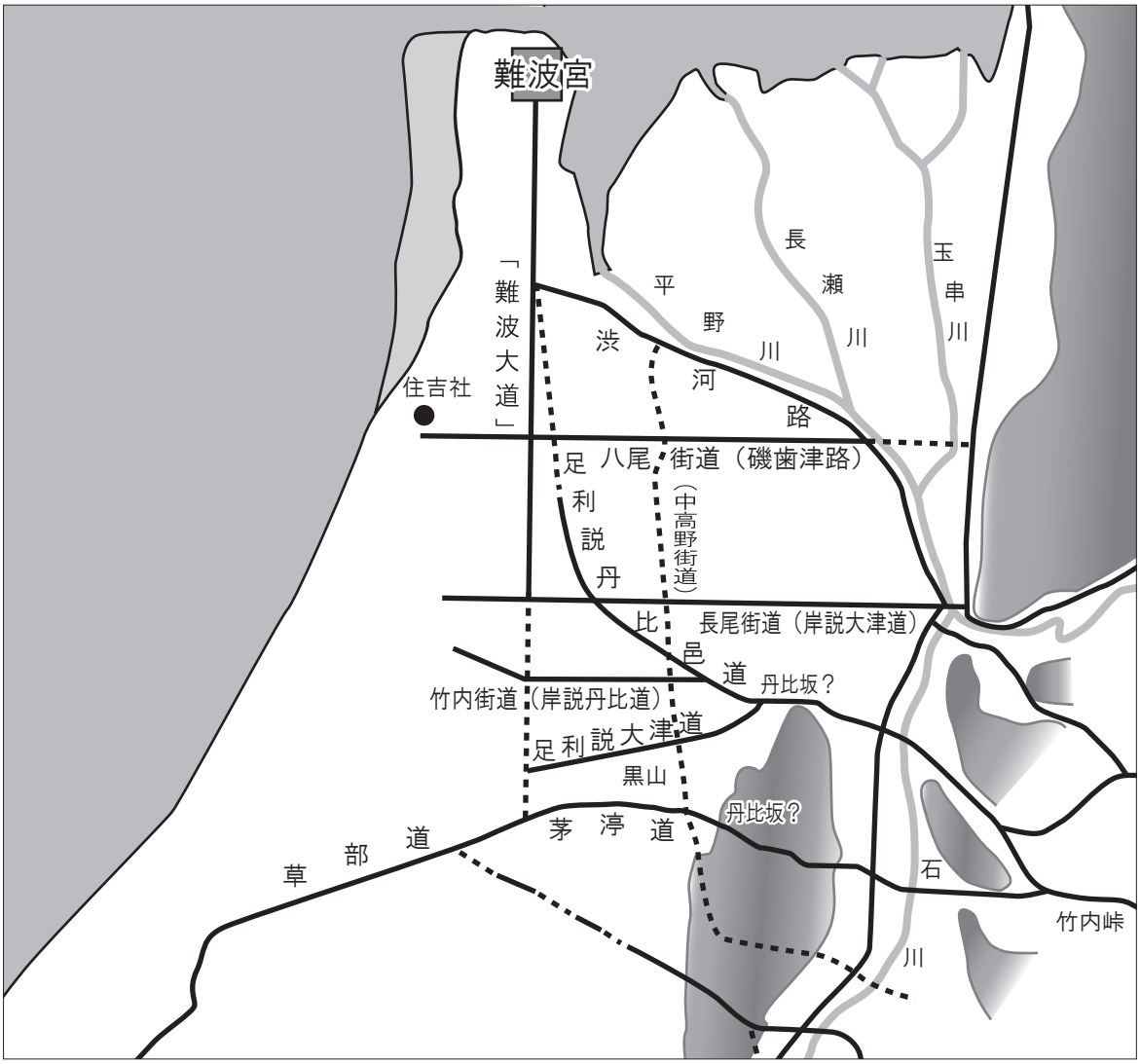

図３　古代難波と主要幹線道路

であろう。書紀に記された聖帝としての仁徳像がいつできたかは詳らかにできないが、難波に宮室があったという伝承はすでに存在した可能性は高い。かつて宮があったという伝承が遷都などの際に考慮された可能性がある。

以上のように考えると、難波には経済性、「旧都」飛鳥との連絡、「歴史」に基づく正統性、という点で、飛鳥を除いた他地域に比べ優位にあったといえるだろう。

この状況は先に見た隋代の事例では文帝の大興城造営よりは煬帝の東都造営に近いといえるだろう。ただ、隋代と比較した場合、中国では大都市の建設に伴い、膨大な人口の移動が起こるのに対し、日本では都市がなく、大規模な人口移動は認めがたい。その点に検討を加えておきたい。まずは発掘で明らかとなった現在までの知見をとりまとめておく。

長柄豊碕宮の遺構とされる前期難波宮は、直前まで存在した大規模な建物群（難波宮下層遺跡）の直上に築かれており、また建物群の方位を自然地形に沿ったものから正方位へと転換させている。宮の建設は既存の建物群の撤去を伴い、また周囲の土地区画を大きく変更する大規模な工事を伴っていた。このことは難波宮内外で検出されている小谷が埋め立てられ、平坦地の造成が目指されて

いることからもうかがえる。この広大な宮城が正方位を意識して築かれたことは、周囲の土地区画にも影響を与えることになった。難波京の復原研究を検出された遺構に基づき実証的に展開されている積山洋氏の研究によれば、孝徳朝に相当する７世紀半ばにおいて、難波宮の周囲で方位を同じくする建物や溝が見られるのは、清水谷までということになる〔積山 2013、2014〕。近年、その南側で、新たに建物遺構が見つかり、南限がさらに広がる可能性はあるが（NS18-3 次調査）、遺構の密度から考えて、さほど広い地域まで地割の規制が及んでいたとは考えられない。

このように７世紀半ばの遺構が検出されるのは、前期難波宮の南方の限られた空間となり、後の藤原京のような条坊制を有する大規模な都城は想定しがたい。これは官僚層の創出が不十分なこと、王族や有力豪族の旧来の拠点（奈良盆地南部）からの分離ができていなかったことが原因であろう。この段階では位階制に基づく宅地班給は考えにくく、難波宮を核とし、その周辺に皇祖母尊や中大兄といった王族、左右大臣を筆頭とする諸豪族が宮や宅を構えるという景観が想定される。そのため、高い計画性を有する都城は、この時点では築く必要もなかったのであろう。

隋では徙民により都城の人口を充実させるという施策がとられた。これは地方の有力者を都城に移住させる古くからの強幹弱枝政策の一つである。翻って７世紀半ばの孝徳の難波遷都の場合、新支配地などはないため、難波への大規模な徙民という施策は考えにくく、大王以下の政権関係者の移住ということにとどまる。京戸が誕生しておらず、位階制も十分に機能していない段階のため、大規模な移住と大規模な条坊区割りが必要とされなかったのである。

おわりに

以上、雑駁ながら隋に見られた大規模な新都城の建設を比較対象とし、孝徳の難波遷都の過程を見てきた。

隋の新都の候補地として、その土地の持つ政治的、経済的優位性、正統性などが理由としてあげることができるが、大興、東都の双方が担保する必要があったのは正統性である。これに加えて都城のもつ政治性あるいは経済性のいずれを優先するかは、文帝と煬帝とでは判断が異なっていた。都城として求められる要素は難波にもある程度共通する。難波にはかつて大王が宮室を営んだという伝承があり、これが王権の地としての難波の正統性を保証する材料となった。また、経済面では難波津を有し、飛鳥よりも優れている点が多い。一方で、政治的には、小郡の存在により、継承できる要素もあったと思われる。

難波遷都が隋の遷都と異なるのは、都市そのもの（この場合は「都市的なもの」）の大規模な移動が伴わなかったことにある。飛鳥には王宮や巨大な寺院がそのまま存続し、豪族の従来の拠点とも強いつながりを維持したままであった。また、徙民による新都の充実という手段も取られることはなかった。孝徳朝の段階で、難波宮を中心とした限られた範囲でしか基盤整備の痕跡が認められないのは、政権の分裂と孝徳の死ということがあり、事業が中途で終わったという事情も重要だが、それに加えて、創出された官人層が薄いこと、京戸が存在しないという段階であれば、後の律令都城のような大規模な都市は必要なかったことに原因を求めることができる。この点からいえば、孝

徳の難波遷都により、新たな地で大王宮を支えることができたのは、すでに難波が都市的様相を示していたからであり、既存のインフラや居民に覆いかぶさるような形で新たな難波の都はつくり出されたということになる。

隋との比較により、都市民の充実という点に大きな違いを認めた。都城が未成立の段階であり、これはある程度予想されたことでもある。後の大津遷都の際と同様に、飛鳥には宮も維持されたままであり、遷都とはいえ、旧都の存在を完全に消すことはできなかったのである。その点では、隋との大きな違いはあるものの、煬帝の東都造営と似た性格を持っていたと評することもできよう。

前期難波宮は後の古代宮室の原型ともいえる先進的な姿をしていたが、その周辺の様相は飛鳥の状況から大きく変わる段階ではなかったのである。

註

[1] 関隴集団への疑義については〔山下将司 2002、2003〕参照。

[2] 洛陽は当初、「東京」とされたが、大業5年に「東都」と改めている。その背景には「京」は1つという意識があり、「京師」大興との差異を明確にしたといえる〔村元 2016、2017〕。

[3]『漢書』巻四三・婁敬伝参照。

[4]『漢書』巻七五・翼奉伝参照。

[5] 文帝の都城政策の基本は、既述のように北周長安を消滅させていることから、前王朝の超克にあったと考える。その一方で、禅譲により王朝を樹立していることから、前朝の存在を完全に否定せず、また制度面でも継承した点が多い。

[6] この点については『日本書紀』孝徳紀・大化五年条に改新政府の右大臣であった蘇我倉山田石川麻呂が謀反の嫌疑をかけられたことから山田寺に逃れ、長男の興志と合流していることや、白雉五年条に中大兄らが飛鳥に戻ったことからうかがえる。

主要参考文献

妹尾達彦 2013・2014「江南文化の系譜－建康と洛陽」『六朝学術学会報』14,15

積山洋 2013『古代の都城と東アジア－大極殿と難波京』清文堂出版

積山洋 2014『東アジアに開かれた古代王宮－難波宮』（シリーズ「遺跡を学ぶ」095）新泉社

仁藤敦史 2011『都はなぜ移るのか－遷都の古代史』吉川弘文館

南　秀雄 2013「倉・屯倉」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『古墳時代の考古学 6 人々の暮らしと社会』同成社

南　秀雄 2018「上町台地の都市化と博多湾岸の比較－ミヤケとの関連」『大阪文化財研究所研究紀要』19 号

南　秀雄 2019「都城制以前の大阪上町台地と奈良盆地の都市化の比較」『大阪文化財研究所研究紀要』20 号

村元健一 2016「隋の大興、洛陽の二つの宮城」『漢魏晋南北朝時代の都城と陵墓の研究』汲古書院（初出 2015 年）

村元健一 2017「隋唐初の複都制－七世紀複都制解明の手掛かりとして」『大阪歴史博物館研究紀要』15 号

山下将司 2002「唐初における『貞観氏族志』の編纂と「八柱国家」の誕生」『史学雑誌』第 111 巻第 2 号

山下将司 2003「玄武門の変と李世民配下の山東集団－房玄齢と斉済地方」『東洋学報』第 85 巻第 2 号

図出典

図 1：劉慶柱『長安春秋』（人民出版社、1988 年）所掲図に加筆。

図 2：銭国祥 2002「漢魏洛陽故城沿革与形制演変初探」『21 世紀中国考古学与世界考古学』（中国社会科学出版社、2002 年）所掲図に加筆。

図 3：足利健亮「難波京をめぐる古代要路網」上田正昭編『古代の日本と東アジア』（小学館、1991 年）所掲図を基に作成。